知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

June 2021 6

知多半島巨木ものがたり三話

阿奈志神社のホルトノキ
樹高13m　根囲4.3m　目通1.75m

知多半島 巨木ものがたり三話

木々の緑が美しい季節だ。
今回は愛知県の天然記念物に指定されている三本の巨木を紹介しよう。
心と身体に巨木のパワーを取り込んで、元気に夏を迎えたい。

一話 阿奈志神社のホルトノキ

ホルトノキ、という不思議な名前の木がある。日本では主に太平洋沿岸から沖縄にかけての暖かい地域に育つ、常緑の高木だ。地域名や愛称というわけではなく、学術的にも認められた正式な植物名である。

この名が生じたのは、江戸時代中期に活躍した本草学者、平賀源内の誤解によるという。讃岐国（現香川県）の高松藩に仕えていた源内が、あるとき藩主に伴って江戸に出た。その途上、紀伊国（現和歌山県）の寺に立ち寄ったとき、一本の木を目にする。源内は自身が著した書物にそれを「ホルトカルの木」と書き記した。

源内が言うホルトカルの木とは、オリーブの木の意味である。ホルトカルはポルトガルのこと。当時、ポルトガルの宣教師が日本にもたらしたオリーブオイルが薬用の「ホルト油」として珍重されており、源内はこの木をどうしたことか「日本にもホルト油が採れる木があった」と

老いてなお強く立つ巨木が、私たちに力をくれる。

多賀神社の社叢。中央がオガタマノキ、右はクロガネモチ。

勘違いしたようだ。

当時の日本にオリーブの木は存在せず（明治時代に小豆島に植樹されたのが最初）、実際にはオリーブとはまったく異なる種類の木だったのだが、以後、この木を「ホルトの木」と呼ぶことが定着し、現在に至っているわけである。学者の源内からすれば誤りから生じた名は不本意だろう。しかし、軽やかな語感は印象的で、一度聞くと忘れられない。

そのホルトノキの巨木が、美浜町矢梨の阿奈志神社にある。小さな川を渡って境内に入ると、左手にホルトノキが聳えていた。高さは約十三メートル。ざらりとした肌の太い幹が空に向かって勢いよく伸びる。すぐ隣にはクスノキの巨木がまるで兄弟のように並んでいる。二本の木の葉が盛大に生い茂り、大きな傘の下にいるようだ。見上げると、ホルトノキの濃い緑色の葉とクスノキの淡い緑の葉が美しいコントラストを描いている。

この木が愛知県の天然記念物に指定されたのは、ホルトノキの北限に近い美浜町で、これほど大きく育つものは珍しいことが理由という。その樹形は、名前のもとであるオリーブにはかなり遠いように思うが、秋に生る実はオリーブに似ているとか。また、古い葉は紅葉するというから、秋に改めてもう一度眺めてみたいものだ。

二話 多賀神社のオガタマノキ

天然記念物は一本の木が単独で指定されることが多いが、中には神社の社叢全体が指定される例もある。知多半島では二か所あり、ひとつは南知多町師崎の「羽豆神社の社叢」。ここは国の天然記念物で、ウバメガシを中心とした暖地性の常緑樹が密生し、トンネルを作っている。もうひとつは常滑市苅屋の「多賀神社の社叢」。こちらは愛知県の天然記念物である。

国道247号沿いにある多賀神社は知多半島南部を代表する参拝スポットなので、読者の皆さんもよく御存知だろう。ここで厄払いをしたことのある人も多いはずだ。本誌では2017年7月号「楽しい絵馬の世界へ」で、十二枚もの大きな絵馬を掲示する絵馬堂を紹介している。

ここも阿奈志神社と同じく、樹木に包まれた小山が神域だ。石造りの太鼓橋を渡って鳥居をくぐり、急傾斜の石段を登ると、広い参道が社殿へと伸びている。さくさくと砂利を踏みしめながら歩くと、日差しを遮る木立がさわさわと風に揺れ、涼しくて心地よい。

日陰を抜けて社殿の前の広場まで来ると、ぽっかりと天が空いており、光が降り注いでいる。聖地ならではの清々しい空間だ。参道を覆う木立は、いわば俗世と聖地を隔てるトンネルのようなものだろうか。

多賀神社には、伊弉諾尊を祀る多賀神社、木花咲耶姫命を祀る富士浅間神社、大山祇命を祀る山神社の三社が、立派な瑞垣の向こう側に並んで祀られている。歴史が古いのは富士浅間神社。かつては「藤原三所大権現」と称し、大永七年（一五二七）に社殿を再建した時の棟札が残っているので、創建はさらに時代を遡るだろう。多賀神社は、元和七年（一六二一）に正元山伏が近江国の多賀大社（現滋賀県多賀町）を勧請したのが起源。今年はちょうど四百年の節目の年で、境内にはそれを伝える幟がいくつも立てられている。

この神社は苅屋の氏神だが、全国的にも有名な多賀大社の分社ということもあってか、古くから地元の人以外の信仰も集めていたようだ。昭和二年（一九二七）に新愛知新聞社（中日新聞の前身のひとつ）が愛知県の新しい名所を読者から募集したとき、約七十物件中の十七位にランクインし、「愛知県新十勝地」の一つに選ばれたこともある。当時の新聞には「壽命神で名高い西浦町の多賀神社。病人に対する御神託がよくあたる」と紹介された。毎年三月の初午の大祭では、以前は旧国道から神社まで約五百メートルの道沿いに縁日の屋台が途切れなく連なるほど賑わいを見せた。

今も厄払いには知多郡全域か

爽やかな緑の隙間から、
差し込む光の眩しさよ。

多賀神社のオガタマノキ
樹高18m　根囲2.07m　胸高囲1.66m　枝張り東西12m、南北14m

ら人が集まり、近年は多い年で、祈祷を行う十二日間に二千人も訪れたとか。ここ十年だけを見ても、一般の参拝者も年々増加傾向にあったという。最近は知多半島屈指のパワースポットとして紹介されることも多いそうだ。そのパワーの源と見なされているのが社叢の木々である。

天然記念物の指定は昭和四十八年(一九七三)。当時西浦南小学校に勤務していた理科の粂浩一教諭が「境内に大小六十本以上のオガタマノキが群生しているのは極めて貴重だ」と、関係機関に熱心に働きかけ、指定に結び付いたという。オガタマノキはモクレン科の常緑高木で、ホルトノキと同じく温暖な土地に育ち、知多半島はその北限に近い。漢字では「招霊木」の表記が一般的で、神霊を招くのに使われたことが名前の由来。招霊は「おきたま」と読み、それが「おがたま」に転じたとされる。

境内でもっとも大きいオガタマノキは、社殿の前に聳えている。高さは約十二メートル。樹齢不明だが枝葉の育ちは旺盛で、瑞垣の内側の社殿をも覆う勢いである。三メートルほどの高さからで分かれた幹が、肘を曲げたかのように直角に折れて上に伸びているのも力強い。なるほど、神霊を招く木というのも頷ける。また、隣にはほぼ同じ樹高のクロガネモチも天を突くように聳えており、こちらも見事である。

このオガタマノキの葉を、ミカドアゲハという珍しい蝶の幼虫が餌にしており、今の時期、境内と神社周辺でミカドアゲハが舞う姿が見られる。この蝶も知多半島あたりが北限とされているそうで、昆虫ファンには垂涎の存在という。しかし、神を招く木の葉で育つ蝶ということは霊力が宿っているはず。捕まえずに、眺めるだけにしておいたほうがいい。

三話　大善院のイブキ

愛知県の天然記念物は、昭和三十年(一九五五)に公布された愛知県文化財保護条例に基づいて指定される。現在、社叢を含む巨木で県の天然記念物に指定されているものは三十三。その中でもっとも新しいのは、常滑市奥条の「大善院のイブキ」である。もとは昭和四十六年(一九七一)に常滑市の天然記念物に指定されていたものだが、平成二十八年(二〇一六)に〝昇格〟して県指定になった。

大善院は知多四国霊場の第六十三番札所である。寺に着いて、真っ先に出迎えてくれるのが表紙の写真のイブキの巨木だ。丘の中腹にある寺へ登る階段から見上げると、まるで緑の大きな玉が今にも転げ落ちてきそうだ。本堂の前に来ると、老熟した太い幹に思わず目を奪われる。その幹から枝が縦横に伸びる様は千手観音の腕のごとし。どこから見ても迫力のある木である。昨年、映画「泣きたい私は猫をかぶる」が公開されたときには、常滑出身の柴山監督はこの木をモデルに「猫島」を描いたのでは…と市民の間で囁かれたとか。

高さは十五・六メートル、樹齢は約六百年。大善院は、室町時代の文明元年(一四六九)に常滑城初代城主水野忠綱により、城の鬼門であるこの場所に整備され、このイブキもその時に植樹されたと伝わっている。ここまでよく育ったのは、伊勢湾からの風が当たらないこと、落雷に遭わなかったこと、水源があり清水が湧いていることなど、さまざまな条件が重なったからだろうとお庫裏さんの外山猶子さんは話す。

外山さんは生まれも育ちもこの寺で、ゆえにイブキにも特別の親しみを感じている。近年は樹木の保護方法を独学し、樹勢が衰えないよう腐心している。イブキの周りには、落ちた種から芽吹いた「イブキの赤ちゃん」がいくつも見られるが、踏んでしまわないよう目印をつけたりもしている。また、数年前に雪の重みで折れた枝で仏師の真野明日人さんが十一面観音像を作って寺に奉納し、イブキの下の祠に安置された。この像もいわば「イブキの子供」だろう。

市指定から県指定になったのも外山さんの熱意によるものだ。この

木は雌株と考えられていたのだが、外山さんがよくよく観察すると小枝の先に、球形で薄緑色の雌花と楕円形で褐色の雄花を付けており、雌雄同株であることがわかったのだ。樹齢や樹勢だけでなくその点でも貴重だと認められ、晴れて県指定天然記念物となったのである。ちなみに県指定のイブキは県内各所に五本あるが、これが最大である。

そんな巨木の下は集いの場としてふさわしい。五十年ほど前には、七月の天王祭りの余興として、イブキの枝にスクリーンを吊り下げて映画上映会を催したこともあったとか。近年は、奇数月の第一土曜日に開かれる「大善院かんのんいち」のときイブキの下に演台を設け、音楽演奏や住職の青空法話を行い、夏にはイブキの周りで盆踊りも催す。大善院のイブキは、一人ひとりにエネルギーを与えてくれるだけではなく、人と人とを繋ぐ力も持っているようだ。

逞しい幹は父のごとし、樹下の安らぎは母のごとし。

大善院のイブキ
樹高15.6m　根囲5.1m　目通3.8m

〈取材協力〉守山徹さん（多賀神社氏子総代長）／永田壽さん／補陀落山大善院
〈参考文献〉美浜町誌 本文編／知多郡史／決定版地図ガイド 知多四国巡礼（歴遊社）／秋季特別展 愛知の名所-名所を調べる・めぐる・つくる-（みよし市歴史民俗資料館）

本誌前号P03「県道262号」は「県道252号」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。